

古代地中海世界におけるフェニキアの宗教の発展と変容

佐藤 育子

はじめに

序文でも記したが、古代地中海世界におけるフェニキア人の果たした役割について、この三〇年間ほどで大きな見直しと再評価がなされていることはすでに述べたとおりである。

だがフェニキア史を扱ううえで、一、自らが残したフェニキア語による文献史料が現存しないために、二、フェニキア史を再構成するには外からの記述が不可欠であり、三、この意味で、フェニキア人とはあくまで他者の眼を通して語られた「フェニキア人」に他ならないという問題がある。では、彼ら自身のアイデンティティはどこにあるのである

うか。

幸いなことに、彼ら自身の生の声は、石碑や墓碑や陶片に刻まれた碑文史料として、地中海およびその周辺地域から現在では断片史料も含めると一万点を超えるものが出土している。ただし、大部分が葬送や祭儀など宗教に関するものであり、多くは断片的で神々への呼びかけなどの定型句をともなう短いものであるという難点は残る¹⁾。

一方で、彼らの故地は東地中海沿岸部（オリエント世界）にありながら、その活動の拠点はジブラルタル海峡を越えて遙か大西洋沿岸部にまで広がって行くのである。つまり、彼らの出自と活動の場の二重性という、フェニキア史、さらにはカルタゴ史を扱ううえでは避けては通れない問題が

ある。しかしこれは裏を返せば、古代移民の先駆けとして、地中海世界を闊達に縦横無尽に動き回ったフェニキア人の特性でもあり、移住の過程において、彼らの信仰や宗教的信条は地中海各地に伝播し、それは現在も残る神殿や神域等を含む考古学的遺構や遺物にみとることが出来る。

ここ数十年、科学研究費助成事業の一環として、彼らが地中海各地に入植し建設した都市遺跡のいくつかを実際に回り見聞し、踏査する機会をいただいたが、その時のインパクトと経験が、人の「移動」にともなう諸段階での文化接触や文化変容が、人々のアイデンティティの形成や発展、変容にいかに関与したかについてさらに深く考えさせる方向へと働いた。

特に、フェニキア人自身の史資料が残っている宗教文化に特化して考えるならば、本稿では以下の点に着目して考察を進めて行きたい。

一、前一千年紀、テュロスが主導したフェニキアの海外発展において、各地にフェニキアの宗教的伝統が移植されたが、すでに存在していた在地の宗教や文化との関りについてはいかなる状況がみてとれるのか。

二、前六世紀半ば、地中海西方ではフェニキア本土の影響力が衰える一方、西方植民都市の中でカルタゴの勢いが突出してくる。そのようななかで、フェニキアの諸相と

カルタゴ（ポエニ）的諸相との間の宗教的伝統はどのようにに発展し、変容していったのか。

三、ヘレニズム期からローマ期にかけての、いわゆる「ギリシア化」、「ローマ化」の過程で、フェニキア的・カルタゴ的伝統はどこまで、あるいはどのようにに生き残ったのか。

むろん、これだけの大きなテーマと問題を掲げる以上、厳密に言えば扱う史料や遺物の分析は膨大なものになることは言うまでもないことであり、現在の筆者の処理能力をはるかに超えていることは遺憾であると言うしかない。そこで本稿では、現地調査で見聞したものの中から、特に関心を抱いたものを中心にいくつかピックアップして紹介し、検討することをお許し願いたい。

一 フェニキア本土の神々

ギリシア人がフェニキアと呼んだ地域、現在のシリアおよびレバノンの沿岸部には、鉄器時代に北からアラドス（アルウド）、ビュブロス、シドン、テュロスの四つの王国が存在し、それぞれが独自の王を戴く互いに独立した都市国家として、一時の例外を除いて汎フェニキア的なまとまっ

た政治的統合体を形成することはなかった。^③一方で、これらの諸都市には地域ごとのバリエーションはあるものの、一对の男神と女神がパンテオンの主神として存在し、政治的には各都市相互の独立性を保持する一方で、宗教的・文化的には非常に同質のものを共有していた。この聖なるカッブルの女神はいつもアシュタルテであり、男神の名前は都市によって違うものの若い神で、たいていは天候神としての属性を帯びていた。^④

本稿では、特に紀元前一千年紀、フェニキアの西方への海外発展を牽引したテュロスの事例に焦点を当てて考察してみたい。

1. メルカルト

鉄器時代のテュロスで崇拜された主神メルカルトに、国家神としてのゆるぎない権威づけを与えたのは前一〇世紀のテュロス王ヒラムである。メルカルトは語義的には「都市の王」を意味し、おそらくテュロス王家の古い祖先が神格化され、歴史的な君主の原型となり、領土と人々の利益の原初的な保護者として機能していったものと考えられる。^⑤ゆえに、本来は王家の守護神として崇拜されるようになったのであろう。前五世紀半ばにテュロスを訪れたヘロドトスは、黄金とエメラルドの二本の柱が燦然と輝くメル

カルト神殿の威容に驚嘆しているが、在地の神官から、この神殿の起源が都市の創建時にさかのぼることを知らされ、逆算するとそれはヘロドトスの時代から二三〇年前のことになるという（Hdt. 2:44）。^⑥だがそれほど古い歴史をもちながら、メルカルトは青銅器時代のシリア・パレスティナにおいてはほとんど目立たない神であった。つまりこの神が歴史の表舞台に登場するのは、ヒラムの時代以降本格化するフェニキア（テュロス）の西方への海外発展と軌を一にしていることは重要である。

紀元後一世紀のフラウィウス・ヨセフスは、メナンドロスによってギリシア語に翻訳されたテュロスの古記録をもとに「・・・彼（ヒラム）はレバノンと呼ばれる山に出かけ、そこから神殿の屋根をふく木材を切り出し、古い神殿を壊して、ヘラクレスとアスタルテに奉納する新しい聖所を造営した。ヒラムはペリテイオスの月にヘラクレスの覚醒を祝った最初の王であった」と記している（Joseph. AJ. VIII. 145-146）。^⑦ここで見られるように、メルカルトはギリシア・ローマ世界ではギリシア神話の文化英雄ヘラクレス／ヘルクレスと同一視される。ヒラムが挙行した、メルカルトの「覚醒」（死からの復活・再生）を祝う儀式はその後毎年テュロスで挙行され、季節の循環と関連するメソポタミアに古くから伝わる「聖婚儀礼」との類似も指

摘⁷されている。また炎によって、一旦死んだメルカルト神の復活と顕現がなされる「覚醒^{エゲシス}」は、ヘラクレスが燃え盛る薪の上で自らを犠牲に捧げ昇天し、神々の世界で不死の命を得て「復活」することと非常に類似点がある⁸。

後代のカルタゴおよび地中海域出土の碑文からは、この「覚醒^{エゲシス}」の儀式を執り行った *MQM ʿLM* 「神を覚醒させるもの」という神殿の要職の存在が確認されているが (*KAI* 44; 70; 90; 93; 161) ⁹、この職務にはしばしば *MTRH ʾSTRNY* 「アシュタルテの花婿」 (*KAI* 44; 93) という形容辞が伴われ、前述の「聖婚儀礼」の存在を裏付けるものと解釈される⁹。

碑文史料の観点から見ると、ヘレニズム期のマルタ島から前二世紀のフェニキア語・ギリシア語の二か国語碑文が出土しており、フェニキア語碑文からはテュロスの主であるバアルはメルカルトであることが、さらにギリシア語碑文ではヘラクレスがテュロスのアルケーゲテース (創建者／創始者) であることが明記されている (*KAI* 47)。

フェニキア語

- (1) 我らが主に テュロスのバアルであるメルカルトに
(これは) 誓ったもの
- (2) あなたの僕 *BD:SR* と 彼の兄弟 *SRŠMIR* が

史苑 (第八三卷第二号)

- (3) (彼らは) *BD:SR* の息子である *SRŠMIR* の二人の息子たち
なぜなら彼 (メルカルト) が聞いて下さったから

- (4) 彼らの声を どうか 彼らを祝福して下さいますように

ギリシア語

- (1) デイオニシオスとサラピオーン
- (2) サラピオーンの (息子たち) であるテュロス人たち
- (3) ヘラクレスに (テュロスの) アルケーゲテースに

つまり碑文史料からは、本土と離れた西方でテュロスのバアルメルカルトヘラクレスの習合がなされているのである。さらにフェニキア人が入植したキュプロス、サルデーニヤ、シチリア、スペイン南西部からは、神の姿を象ったと思われる青銅製の神像が複数例見つかった¹⁰。おそらく神殿への奉納物として制作されたものであろう。像のなかには右手を振りかざし、両足を大きくスライドさせ、左足を前方に踏み出す「スマイティング・ゴッド」のポーズをとり、天候神バアルあるいはレシエフを体現していると考えられるものも含まれる (図1) ¹⁰。バアルの姿は雨の恵みがもたらす豊饒と王国の安寧の概念を示しているもの

図1「スマイティング・ゴッド」のポーズをとる神像：

E. Lipiński(ed.), *Dictionnaire de la civilisation phénicienne et punique*, Turnhout, Brepols, 1992, p. 411, Fig. 302. パレルモ国立考古学博物館蔵



古代地中海世界におけるフェニキアの宗教の発展と変容（佐藤）

と考えられ、東方の王権観がフェニキア人の西方への発展とともに、東から西へ伝播していった可能性を示すものでもある。特に極西のイベリア半島は、ガデスの事例にみるように都市の創建時から母市テュロスとの結びつきが強く(Strabo, 3. 5. 5-6; Vell. Pat. 1. 2. 3)、さらに時代が下って前三世紀には、イベリア半島がバルカ家の支配に組み込まれていく過程において、メルカルトとヘラクレスの習合はプロパガンダとして用いられて

いくことを岡村美幸は指摘している。^①

神殿は単に神を祀る祭祀の場でなく、宗教的機能と同時に政治的・経済的機能も包含していた。神像を奉納することは奉納者にとって遠く離れた祖国を忘れず、テュロス王家そのものに忠誠を誓う行為でもあったに違いない。前三三二年にアレクサンドロス大王がテュロスを攻囲した際、メルカルト神殿へ奉獻するカルタゴからの使節団がちょうどテュロスに滞在していたことが示すように(Anab. 2. 24. 5)、後代にいたるまで、神殿は母市と植民市

を結ぶ紐帯として機能し続けたのである。

このように考えると、メルカルト神はテュロスを中心とするフェニキアの西方への海外発展とともに、王権観や豊穡の概念に加え、航海の安全を守る守護神としても崇拜され、移住先と母市（本土）との強い結びつきを保持させる一方で、他の移住者集団や在地の人々にも文化的影響を及ぼ

していったのではなからうか。テュロスの主神メルカルトが、ギリシア世界では英雄神ヘラクレスと同一視されていく過程もこの文脈において理解されるべきであろう¹³⁾。また「海に生きる民」として、ホメロスやヘロドトスの作品に登場するギリシア人とフェニキア人には共通性があるとも指摘される。地中海世界におけるメルカルト崇拜の伝播は、人やモノの移動にともなう異文化間の接触による文化変容が、宗教的側面より強く表出される側面を如実に示しているものとみなすことができる。

2. アシユタルテ（アスタルテ）

では次に、メルカルトの相方の女神であるアシユタルテについて検討してみよう。アシユタルテは、メソポタミアではシュメールのイナンナやアツカドのイシュタルにさかのぼり、のちのギリシアのアフロディーテやローマのウェヌスへとつながる系譜を持つ、一貫した共通性と伝統を持つ女神である。シリア・パレスティナでは、しばしば天候神の配偶女神として登場するが、その属性は戦いの神でありまた性愛の神でもあり、しばしば豊穰や多産の概念とも関連づけられる。メルカルトと違って、アシユタルテはすでに青銅器時代のエブラ、マリ、エマル、ウガリト出土の各文書にも言及されており、フェニキア人の西方発展と

ともにその女神の痕跡は、地中海周辺地域に現存する碑文や考古遺物や遺跡のなかに広範囲に認められる。ここではいくつかの事例をもとに、アシユタルテがどのように崇拜され、また他の女神といかに習合していったのか、主に地中海方面に目を向けて地域別に考察してみたい。

① スペイン ガレーラ出土の玉座に座る女神像

図2は、スペイン南部グラナダ県ガレーラの共同墓地から出土したアラバスター製の儀式用容器（高さ一八・五センチ）である。この像の製作年代は紀元前八世紀前半と考えられ、おそらくシリア・パレスティナの工房で製作されたものであろう。東方からの移住者とともに現地に持ち込まれ、そこで何世代にもわたって再利用された結果、最終的には前五世紀後半、在地の創始者の墓とされる王墓に埋葬されたものと解釈されている¹⁴⁾。

「ガレーラの貴婦人」として知られるこの女性坐像は、頭頂部のくぼみから注がれた香油が胸元の二つの穴（乳首）から流れ落ちて手元の鉢に集められ、死者を聖別するための葬送儀礼で使われたものである。有翼のスフィンクスの玉座に座る女性像は、銘文は刻されていないが女神アシユタルテを模したものであるというのがほぼ統一的な見解である。鉄器時代のスフィンクスの玉座は、アシユタルテ



図2：ガレーラ出土の玉座に座る女神像 マドリード国立考古学博物館蔵
筆者撮影

と緊密な関係があるとされており、フェニキアの宗教では偶像を用いないアニコニックな表現がしばしばみられる（図3）。前二世紀のフェニキア本土のテュロス近郊で発見されたスフィンクス⑬の玉座には、「わが女主人へ アシユタルテヘ」という銘が刻まれており（KAI 17）、それがこの見解を追認する材料ともなっている。C・ロペス・ルイスは、有翼のスフィンクス像は鉄器時代のフェニキア美術の典型的な特徴であり、フェニキア・カルタゴ文化の影響の及んだ全域に遍在しており、ギリシア彫刻に見られるスフィンクスもエジプトからの直接の模倣ではなく、フェニキアを経由してのものであったと論ずる^⑭。移動や移住にともなって、フェニキア人とギリシア人の文化交流が、このような美術表現や技法にも表れていくのは興味深い。

② スペイン セヴィーリヤ近郊出土の女神座像

図4はスペイン・アンダルシア地方、セヴィーリヤ近郊で発見されたアシユタルテの銘のついた女神座像である。残念ながら玉座そのものは失われているものの、右腕をあげ祝福のポーズ



図3：アシュタルテの玉座
ペイルート国立考古学博物館蔵
筆者撮影



図4：セヴィーリヤ近郊出土の女神座像
セヴィーリヤ考古学博物館蔵
筆者撮影

ズをとっており、大きく見開かれた瞳やエジプト風の髪型、突き出たふくよかな胸はいかにもオリエント風のスタイルである。台座に刻まれた碑文は、西地中海域で出土したアシュタルテに言及するもつとも古い碑文と目される（*TSSI* III 16）。

(1) ~ (3)

・・・DMLKの息子 BLYTN と YSLの息子、DMLK
の息子、BDBL が

つくった（もの）

(4) 我らの女主人 HRのアシュタルテのために

(5) なぜなら彼女（アシュタルテ）が彼らの祈りの声を
聞いてくれたから。

銘文からこの像は、一組の兄弟が祈願の成就を感謝してアシュタルテに奉獻したものであることがわかる。アシュタルテがシリアやメソポタミアの伝統を受け継ぐことを考えれば、HRは地名のフリを表しているものと解釈でき、北シリアのフリのアシュタルテと同定される¹⁹。

ギリシア語史料でタルテッソスと呼ばれるこの地域は、フェニキア人の入植地域と隣接するグアダルキヴィル河下流域を中心とした先住民の文化圏である。近年、エル・カ

ランボロやカンチョ・ロアーノなどの遺跡の考古学的成果の進展と出土遺物の再吟味により、ここでは東方由来のアシュタルテとバアルを祀る複合的な聖域が構築されていたことが判明し、新たな知見が増大した²⁰。フェニキアの宗教的要素が、このようにフェニキア人の本来の居住地である集落の外にまで広がっていたことは、東方化を示すと思われる神殿などの構造物や神像、描かれるモチーフなど、さまざまな物質文化が、移住者と在地の人々の間でグローバルにかつ弾力的に相互に吸収され、やがて同化し融合していった過程を物語るものである。

③マルタ島 タス・シルジの聖域およびそこから出土した陶片に刻印されたアシュタルテの銘

中央地中海に浮かぶマルタ島は、鉱物資源は産出されないものの良質な石灰岩（グロビジェリーナ）に恵まれ、新石器時代の神殿群もその豊富な石材で建造されたものである。また入り組んだ入り江を持つ島の地形は良港に恵まれ、後代の史料はこの島が航海のための重要な避難所の役割を果たしたことを伝えており（*Diod.* 5. 1. 12）、シチリア島から北アフリカ方面に南下する際の交易路の要衝として発展していったことが理解できる。

神殿遺構から出土する大型の豊満な女性坐像は、マルタ

島およびゴゾ島では新石器時代にさかのぼる女神崇拜が盛んに行われていたことを示すものである。だがこの巨石文明は前二五〇〇年頃に突然終焉を迎え、青銅器時代を経て鉄器時代に入ると、この島に入植したフェニキア人によって島の景観は大きく変えられていった。マルタ島南部のタス・シルジでは、新石器時代の神殿遺構はアシュタルテを祀る神殿へと改変され、前五世紀以降、アシュタルテの名を記した陶片が数多く発見されている。その後この聖域は、ギリシア・ローマ世界のヘラ／ユーノーを祀る神殿へと改変され、伝統的な女神崇拜が一貫して継続していったことを示している。一方で、マルタの物質文化は、他の西地中海域とくらべて東方化の影響を強くは受けておらず、そこには地元の伝統を受け継ぐハイブリッドな文化が展開していったことがうかがえる。

④ エトルリア ピュルギ出土の黄金板

中央地中海において、唯一フェニキア人の確たる入植地が発見されていないのはイタリア半島である。しかし文献史料および考古資料から、前六世紀半ばから前五世紀初頭にかけての地中海西方の政治的・軍事的・宗教的状况に関する重要な情報がもたらされている。

イタリア半島には現在のトスカナ地方を中心として、

ローマ興隆以前にエトルリア人の高度な文明が開いていたことはよく知られている。この辺り一帯は、鉄や銅、鉛、銀、錫などの鉱物資源が豊かで、対岸のエルバ島も「鉄の鉱脈が豊かな島」として後代の『アエネーイス』でも言及されている (Verg. Aen. 10. 147)。地中海の鉱物資源の獲得ルートと連動しているフェニキア人の地中海航路開発の途上に、エトルリアとの接触があったことは確実であろう。特に対岸の北アフリカ沿岸部に位置するカルタゴにとって、エトルリアとの通商関係は重要であった。アリストテレスは『政治学』のなかで、エトルリア人とカルタゴ人との間には、輸出入品に関する取り決めや不正を行わないこと、軍事同盟に関する協定があったことを記している (Arist. Pol. 1280a38-40)。

一九六四年に、エトルリアの都市カエレの外港の役割を果たしていたと考えられるピュルギから発見された三枚の黄金板は、二枚がエトルリア語、一枚がフェニキア語で記された二か国語碑文であり、前六世紀後半に年代づけられるものである。完全な対訳ではないものの、フェニキア語の碑文からは、カエレの支配者テファリエ・ウエリアナスがフェニキアの女神アシュタルテを祀る祠を奉献したことが知られ (KAI 277; TSSI III 42)、それはエトルリア語の碑文では、ウニ (ローマのユーノー) と呼ばれた女神で

あったと同定されている。⁽²⁵⁾つまりこの碑文から、フェニキアの女神アシュタルテはエトルリアでは女神ウニと習合し、王もかわる宗教祭祀にフェニキアの宗教が深く関与していたことを示すものであると捉えることができる。碑文の七行目から九行目にかけては、奉獻の儀式が行われたのは「王の治世三年目のキラルの月の神の埋葬の日」（傍点筆者）とあるので、ヒラムが行った死と復活の儀式である「覚醒」^{ユダシス}がここでも執り行われた蓋然性が高い。

同時期の中央地中海では、コルシカ島に進出したポカイア人とエトルリア、カルタゴの連合艦隊がアラリア沖の海戦で戦い（前五三五年頃）、ポカイア側が辛勝するものの、実質的にはエトルリア、カルタゴ連合軍の勝利で終わったことをヘロドトスは伝える（Hdt. 1. 166-167）。これにより、ポカイア人のさらなる西方への地中海進出はいったん押し戻されることになったので、エトルリアとカルタゴの同盟関係は、単に宗教的なものに限定されたものではなく、それは経済や政治、軍事面にもおよぶ当時の地中海の勢力範囲を塗り替える大きな要因となったことがわかる。なお、エトルリアの支配を脱し、王政から共和政へと大きく転換したローマとカルタゴが最初の国際条約を締結するのは前五〇九年、共和政第一年のことである。ポリュビオスが伝える条文からは、サルデーニャはカルタゴの支配領域とさ

れ（Polyb. 3. 22. 8-9）、前六世紀末頃はまさに、カルタゴが西地中海の覇権を経済的にも軍事的にも固めつつあった時期と合致する。それは同時に、西方地中海のフェニキア人世界で、宗教面でもカルタゴを中心とするポエニ世界の神々が前面に出てくる転換点となる時期であった。

二 カルタゴ（ポエニ世界）の神々

前六世紀以降の西方のフェニキア人世界でもっとも人気を集めたのは、男神バアル・ハモンとタニト（ティニト）である。元来はオリエント起源であるこれらの神々が、カルタゴおよび周辺のポエニ世界で守護神として崇拜されていく過程には興味深いものが見受けられる。

① バアル・ハモン

バアル・ハモンという神名は、すでにジンチルリ出土の前九世紀後半の碑文に言及がある（KAI 24）。その名前については「香壇の主」あるいは「アマヌス（山）の主」、「祠の主」など、様々な解釈が試みられてきたが、この神が古くから農業神としての性格を帯びていたことは、ほぼ間違いない。チュニジアのスース（古代のハドルメトウム）からは、有翼のスフィンクスの玉座に座り、山高帽を被り、



図5：玉座に座るバアル・ハモン像 スース考古学博物館蔵

P. Xella, *Baal Hammon : Recherches sur l'identité et l'histoire d'un dieu phénico-punique*, Roma, Consiglio Nazionale delle Ricerche, 1990, planche VII-5.

小麦の穂のついた王杖（笏）を左手に持つ、最古期（前五世紀）のものといわれるバアル・ハモンを表した石碑が出土している（図5）。右手を信者に対して掲げる祝福のポーズをとるこの神が、ギリシア・ローマ世界のクロノスやサトゥルヌスと同一視されることから明らかであるように、背後に肥沃な大地が控える北アフリカでは、豊穡の概念は何よりも好まれたものであったに違いない。

②タニト

一方タニトは、前五世紀以降、バアル・ハモンの相方の女神としてポエニ世界の宗教の中で特異な地位を占めることになる。フェニキア本土のシドン近郊サレプタから、前七世紀から前六世紀のものと見られる「タニト・アシユタルテ」という女神の名前が刻印され

た象牙板が発見されており、この女神のオリエント起源が明らかになったが、前一〇〇〇年紀前半の東地中海世界ではそれほど重要な女神ではなかった。むしろ、タニトとアシタルテとの緊密な関係が想定されるのであって、もともとタニトはアシタルテのペルソナ（位格）のひとつであった可能性も考えられる。だが、カルタゴのボルジュ・ジェディド出土の「女主人たちへ アシタルテとレバノンのタニトへ 新しい聖所（複数形）を・・・ *lbt l'šrt wlnu blm mšm hšm*・・・」で始まる前四世紀から前三世紀の建造碑文（*KAI 81 = CIS I 3914*）は、両女神に別々の聖所を建立したことを示しており、アシタルテとタニトは、カルタゴではそれぞれ別の女神として崇拜されていたことが明らかとなった。

カルタゴのトフェト（後述）からは、ほぼ次の定型句で始まるタニトとバアル・ハモンに奉獻された多くの奉納石碑がみつかっている。

lbt lmt pn b' l w' dñ l b' l hmn 'š ndr X・・・・・・
女主人「バアルの顔」であるタニトへ そして主バアル・ハモンへ（これは）何某が、誓願したものである

これはいくつかの示唆的な観点を含んでいる。まず、タ

ニトの形容辞である「バアルの顔」は、彼女のパートナーであるバアル・ハモンと人間界との間の仲介者としての彼女の役割を強調するものと考えられる。特にカルタゴ出土の碑文で特徴的なのは、前五世紀以降の誓願に際して、ポエニ語碑文では、タニトの名前が必ずバアル・ハモンに先立ち呼称される点である。ゆえにカルタゴの宗教においてある時期から、バアル・ハモンを凌駕してタニトの姿が前面に出てくる点の特筆すべきであろう。タニトの属性は碑文史料が明らかにするように、母神（*CIS I 195; 380*）であると同時に冥界の神（*CIS I 177*）でもあり死と再生を司ったと考えられ、図像学的には「タニトの印」と呼ばれる水平線で仕切った上部の円盤と下部の三角形であらわされるのが一般的である。ところが、西方のフェニキア人の人植拠点のひとつ、イビサ島の北東に位置するエス・クイエラムの洞窟の聖所からは、記号ではなくタニトを模したと考えられる夥しい数のテラコッタ製の小立像が見つかった。る。

③イビサ島とタニト崇拜

イビサ島は西方フェニキア人の拠点となった島であり、前七世紀半ばには定住の痕跡がサ・カレタなどで確認されている^①。この島はスペイン東岸のカタロニア地方とフラン

ス南部を結ぶ交易路の結節点にあたり、さらに中央地中海と西地中海を結ぶ海上ベルトの中継点に位置しており、交通の要衝にあった。火葬から土葬への埋葬方式の変化にも見られるように、前六世紀半ば以降は中央地中海、特にカルタゴとの結びつきが強まり、前五世紀後半から前四世紀前半にかけてはポエニ系イビサ社会の進展が顕著に認められる時期である。先述したサ・カレタは前六世紀前半には放棄され、人口はイビサ湾に面するイビサ・タウンに集中していくが、前四世紀前半のイビサ・タウンの人口は五〇〇〇人から六〇〇〇人と見積もられ、島内にも多くの農村集落が出現していく時期と重なる。ここからは、人の移動は宗教面でも少なからず影響を与えたことを念頭に置き、考察を進めて行く。

エス・クイエラムの聖所は、イビサ・タウンから直線で約二〇キロメートル離れた島の北東部、セント・ヴィンセント溪谷の海拔一五〇メートルの斜面に位置する天然の洞窟である。前五世紀末までには建立され、前三世紀には隆盛を極めたが、その一世紀あとにはおそらく洞窟内の自然崩落により放棄されている。興味深いことは、溪谷周辺には前五世紀後半以降、多くの農場とでも呼ぶべき小さな農村集落が次々とつくられたことである。⁽³³⁾ エス・クイエラムが聖所として機能し始めるのはまさにこの時期からであ

り、その活動がピークに達する前三世紀から前二世紀にかけて、溪谷周辺の農村集落は八か所から一四か所に増えていることから、⁽³⁴⁾ 周辺の居住者の共通の聖域としてこの聖所が重要性を帯びていったことがうかがわれる。

一九〇七年から一九〇八年にかけて行われた最初の発掘で発見されたテラコッタ製の小立像は、断片的なものも含め総数で一〇〇〇点をゆうに超える膨大なものである。⁽³⁵⁾ 一九二三年にここで発見された一枚の青銅板の両面に、それぞれレシエフ・メルカルトとタニトの名前が刻字されており、その時期は字体等から前者が前五世紀から前四世紀、後者が前三世紀から前二世紀ないしは前一世紀にかけてのものとして推定されている(図6)。つまりこれは、この聖所ではフェニキア・ポエニ系の男神と女神がそれぞれ崇拜の対象になっていたことを示すものと解釈される。高台にある洞窟の東側には海が広がっており、海事との関連で考えれば、メルカルト崇拜はごく自然な流れであろう。だがごく最近では、レシエフ・メルカルトに言及する片面は洞窟外のどこかで刻字され、あとからこの場所に持ち込まれたもので、エス・クイエラムの聖域では一貫してタニトが崇拜されていたという説も浮上している。⁽³⁶⁾

小立像の多くは胴体部が有翼で、さらにカドケウス(聖杖)や太陽円盤、三日月など、カルタゴ出土の奉納石碑に



図6：タニトの銘が刻字された青銅板 アリカンテ考古学博物館蔵
筆者撮影

もよくみられるアイテムが施されている（図7）。ゆえに、青銅板に刻まれた銘文から、この小立像がタニトを表しているのは間違いないであろう。加えて興味深いのは、この像が、ギリシアの穀物の女神デメテルと結び付けられるカラトスを頭に戴いている点である。だが、デメテルの祭儀には必要不可欠なオイル・ランプやトーチは出土していない^③。一方で、エス・クイエラムの洞窟および周辺からは、屠られて焼かれて食されたものと思われるヒツジやヤギの骨が大量に見つかっており、犠牲を伴う饗宴が行われたことを示すものと考えられる。しかしここでも、デメテルの祭儀に特徴的なブタの骨は出土していない。これはフェニキア・ポエニ社会ではブタを食することは禁忌であったことと関連付けられるものであろう^④。

デメテル信仰が、ヘレニズム期の西地中海世界においても人気を集めたことは各地から出土する女神の頭部をかたどった香炉からも確認される。カルタゴでも前三九六年、マゴ家のヒミルコのシチリア遠征失敗の後、公的祭儀としてデメテルとコレーの祭儀がシユラクサから導入され、名門の人々がこの女神の神官に選ばれたことをディオドロスは伝える（Diod. 16. 77. 5）。これが一般的に、カルタゴの宗教の「ヘレニズム化の始まり」という現象と捉えられている。しかし、デメテル信仰がどのように、そしてなぜ、

図 7 :

右

エス・クイエラム出土のタニト像

カタルーニャ州立博物館蔵

筆者撮影

下

カルタゴのトフェト出土の奉納石碑

左下

カルタゴ国立博物館蔵

「古代カルタゴとローマ展」図録 72 頁

© I N P

右下

カルタゴのトフェトにて筆者撮影



北アフリカやシチリアを經由してイビサに伝わったのか考慮しなければ、イビサにおいてヘレニズム期にはデメテル崇拜がタニトとつながったと解釈するには無理があるとする考えもある⁽⁴⁰⁾。むしろこの女神像は、周辺の農村集落とも結びつく在地との関り（ネットワーク）の中で、農耕女神としての性格を帯びたデメテル祭儀のギリシア的要素を取り入れたポエニ的宗教文化の発露のバリエーションの一つと考えることこそ可能なのではなからうか。前述したように、タニトの属性は多岐にわたるが、母神であると同時に冥界の神でもあり生と死を司った。うつそうとした洞窟は、まさに冥界と結びつく舞台装置として最適であったに違いない。

有翼の女神（女性）像は、同時期（前三世紀）のカルタゴ出土の女性神官の石棺の蓋にも施されている図像である（図8）。この像が出土したカルタゴのサント・モニクの共同墓地は、神官などの高位の人々が埋葬されていた場所であり、二〇〇九年から二〇一〇年にかけて日本を巡回展示した「古代カルタゴとローマ展」でも出品されていた⁽⁴¹⁾。アクトテリオンをもつ屋根型の蓋はギリシア様式の特徴を示している一方で、髪型はエジプト風であり、下半身は大きな翼によって包み込まれている。エス・クイエラムのタニト像がそうであったように、鳥の羽はオシリス神話のイシ

スを想起させ、右手に持つハトはアフロディーテの象徴動物であるので、ヘレニズム期にはイシスとアフロディーテが習合したことを示している。この図像を、フェニキア、ギリシア、エジプトなどの芸術的潮流に着想を得たカルタゴ本国の作例と考えるならば⁽⁴²⁾、周辺の文化を吸収した彼ら自身のハイブリッドなアイデンティティの表出の一例と言えるであろう。

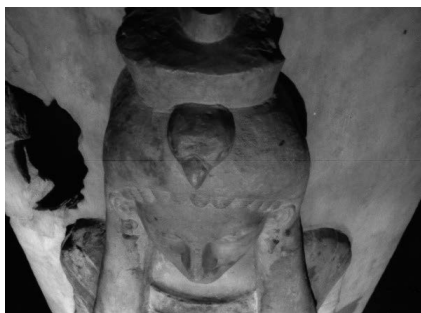
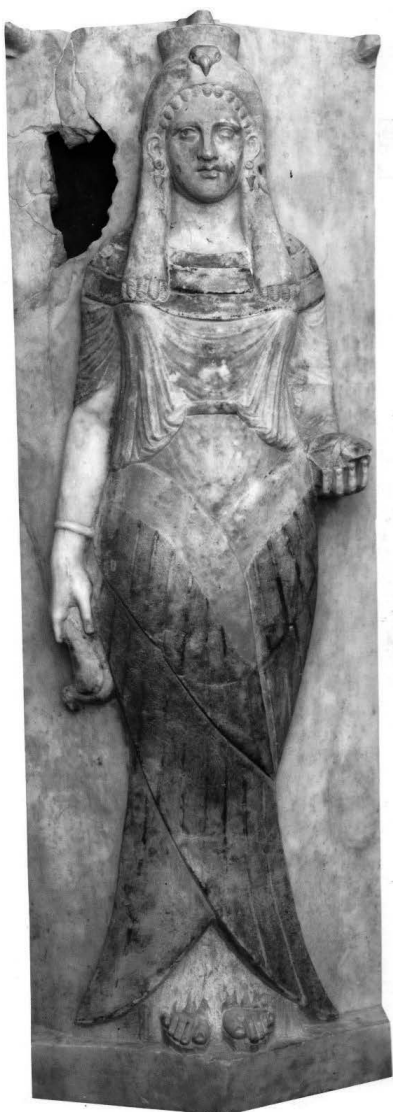
④ アシュタルテとタニト

ここで、西方におけるアシュタルテとタニトとの関係について、現時点での筆者の考えを整理しておきたい。現地の博物館を訪れると、展示品のプレートにアシュタルテとタニトが併記されている例をままみかけることがあるが、残念なことにそれらについての詳しい説明は特段なされていない。疑問に思うことは、西方ではアシュタルテはやがてタニトとつながられたのか、それとも両女神は並立して存続したのだろうか、ということである。前述したカルタゴ出土の碑文が示すように、ある時期を境に、両女神はそれぞれ別の位格をもつ神としてカルタゴで信仰された。だが、マルタのタス・シルジャやシチリア西部のエリユクスの山頂ではアシュタルテの信仰が継続して行われており（GSI 136）、ギリシア世界ではエリユクスのアフロ

図 8 :

有翼女性神官の石棺（蓋部分）
カルタゴ国立博物館蔵
「古代カルタゴとローマ展」図録 77 頁
© I N P

日本巡回展示時のもの
仙台市博物館
筆者撮影



ディーテーとして崇拜されていた（Paus. 8. 24. 2）。エリユクスはエリユモス人の拠点であり、フェニキア人やカルタゴ人と同盟関係にあった都市でもあり（Thuc. 6. 2. 6）、これは先述のエトルリアとカルタゴとの同盟関係を彷彿とさせる。しかし、西方のポエニ世界で人気を集めたのはタニトの方で、彼女はギリシアやエジプトなどさまざまな外来の女神の要素を取り入れ崇拜されていく。おそらくアシユタルテ崇拜は継続する一方で次第に弱まり、本土の事例とは逆にタニト崇拜に同化していった部分も多いのではなかろうか。そうであるならばカルタゴ出土の女性神官の蓋に施された図像も、このような要素を取り入れたタニト女神を模したものであると考えることができる。

⑤ローマ期のポエニ世界の神々

前一四六年のカルタゴ陥落後、ローマ支配下に入った北アフリカには、根強く土着の信仰が残ったことは、ナブール近郊ティニースト出土のローマ時代（二世紀）の新ポエニ語碑文や彫像にも見出すことができる。新ポエニ語碑文から、TNSMTの市民がバアル・ハモンとタニトにそれぞれ神殿を奉献したことが知られ（KAI 137）、バアル・サトウルヌスの聖域からは、スフィンクスの玉座に座り、右手を祝福の形に掲げたバアル・ハモン像やライオン

の頭を持ち、鳥の羽の衣装をまとった立位の女神像が出土している（図9）。なお、この女神像に関しては、ライオンの頭を持ったタニト女神と解釈する説がある一方で、セクメト女神を想起させるエジプトの影響を考慮する意見もあり、ローマ時代のこのような像は、アフリカを擬人化したものとしてみなされる^④。いずれにせよ、ライオンの頭部は力強さそのものを意味するものであるならば、この女神の姿は、豊かな実りを約束するアフリカの大地の逞しさや豊穡の象徴そのものでもあったのであろう。

⑥トフェトの祭儀

最後に「移動」の視点から、カルタゴ（ポエニ）世界のトフェトの祭儀について触れておきたい。トフェトとは、旧約聖書の幼児供犠の記述になぞらえて（王下二三章一〇節・エレ七章三一―三三節、一九章六一―三三節）、乳幼児や動物の焼却された骨を含む無数の骨壺と石碑が出土した露天の聖所である。トフェトの存在が確認されるのは、サルデーニャやシチリア、マルタおよび北アフリカなどの中央地中海の一部地域に限局され、本土や西方のフェニキア系初期居住地からはその存在は確認されておらず、地域的な特殊性は考慮されるべきであろう^⑤。近年再燃した幼児犠牲の有無やその論争等に関してはすでに別の論考で論じて

図9：

右 ライオンの頭を持つ女神像

下 バアル・ハモン像

バルドー博物館蔵



S. Aounallah(ed.), *Je suis Bardo: un monument, un musée*, Tunis, 2016. pp.367-368.

いるので詳細については割愛するが、ではこの慣習を、もし東方からやってきた人々が持ち込んだものであるとするならば、それはどのように解釈したらよいのであろうか。

J・クインは、トフェトの存在（出現）こそが、カルタゴを中心に据えるポエニ化の指標と考えられてきた従来の学説に対して、カルタゴ興隆以前の中央地中海に「トフェト・サークル」と名づけられる、可視的に互いの距離を保ちつつ、独立しながらも相互に関連した交差的なネットワークが機能していたことを指摘する^⑧。彼女は幼児犠牲の存在を肯定した上で、トフェトの祭儀は、中央地中海域に移住してきたフェニキア語を話す人々の小さな集団のなかで行われたものであったとする。この集団は、彼女によれば本土での宗教的慣習を認められなかった人たちであり、宗教的、商業的に本土や西方の他の地域への移住者と自らを差異化するため、自らの文化的アイデンティティを表出するための舞台装置としてトフェトを使用したと解釈するのである^⑨。

P・クセラはトフェトの出現を二つの時期に区分して捉え、以下のように考える^⑩。前者は時期的には前八〇〇年から前四世紀までで、そこには、カルタゴ、ハドルメトゥム、モテュア、スルクス、タッロス、ビティア、ノラ、カリアリ、モンテ・シライ、マルタなどが含まれ、それは各々の都市

の創建の時期とほぼ重なっている。そこでの守護神はいつもバアル・ハモンであり、カルタゴにおいてのみタニトが同伴すると、彼は指摘する。このうち、カルタゴ、スルクス、モテュア、タッロスなどの最も初期のトフェトはほぼ同時期に、東方からやってきたフェニキア人によってつくられた。一方後者は、カルタゴの直接的・間接的影響下のもとに、前四世紀から前三世紀にかけて創建されたもので、エル・ホフラ（コンスタンティヌス）、アルティブロス、マクタール、テブルスークなど、現在のモロッコからリビアまでを含む北アフリカの内地部にまで及んでいる。なお後者は、前一四六年、ポエニ戦争でカルタゴが滅亡したのも紀元後二世紀ないし三世紀前半までは存続し続け、そのあとはバアル・ハモンとタニトの後裔であるサトゥルヌスやカレスティスを祀る聖域へと変貌していった。

ここまですべてを整理して考えると、トフェトの祭儀は都市の創建時から存在する、都市共同体としての共通の祭儀であったことは重要である。だがその実態に関しては判断する材料に困難な部分も多く、近年の論争の再燃も決定的な決着はつかぬままである。だがこれをフェニキア人が持ち込んだ宗教的伝統の一形態と考えるならば、同族集団と見なされる人々の間の差異、移動する人々つまり移住者間の相違、さらには在地の人々との関係、あるいは取り巻く周囲

の環境などを改めて考慮して慎重に検証する必要がある。一方で、移住先に移植された彼らの宗教的伝統がローマ期に入っても生き残り、形を変えてローマの神々とも習合して存続していったことも忘れてはならないであろう。

結びに変えて

これまで考察してきたことを簡単に振り返ってみよう。筆者は以前、地中海周辺に伝播したテュロスの主神であるメルカルトとアシュタルテの崇拜が、カルタゴ興隆後はバアル・ハモンとタニト崇拜に凌駕され、それが西方地中海におけるフェニキアからカルタゴへの覇権の交替と連動したと推察した⁵¹。この考えをまったく否定するものではないが、今回、本稿をまとめる過程において、ポエニ世界の都市相互間の関係性や各都市と本土とのそれを個別に検証し、さらに精査する必要性を改めて痛感した。そして、フェニキア人が向かった移住先の文化が外来の文化であるフェニキア的要素を急速に吸収しフェニキア化されたのか、あるいは移住者であるフェニキア人そのものが先住民の文化に取り込まれたのか、判断に難しいところがあるのは否めないが、文字史料が限られているからこそ、さらなる考古学や人類学と歴史学の共同作業の成果に期待したい。

フェニキア人のもたらした宗教的・文化的伝統の移植の背景には、少なからず周辺の宗教文化とのあいだに連続性が認められる一方で、フェニキア的諸相とカルタゴ（ポエニ）的諸相との間には相違性が認められることも明らかである。そこには、移動する側の視点のみならず、移動する人々と彼らを迎え入れる在地の人々との間の双方の多角的なネットワークが存在したことも考慮に入れて考えるべきであろう。そしてヘレニズム期以降、外来のさまざまな神々の要素を取り入れ、汎地中海的な神々の属性を帯びるようになったフェニキア・カルタゴ世界の神々は、ローマ帝国期においてもなおその伝統的痕跡を残しつつ崇拜され続けたのである。

略語表記

CIS I: *Corpus Inscriptionum Semiticarum* I

ICO: Guzzo Amadasi, M. G. (1967) *Le iscrizioni fenicie e puniche delle colonie in Occidente*. SS 28. Rome,

Istituto di Studi del Vicino Oriente.

KAI: Donner, H. & Röllig, W. (1962-2002) *Kanaanäische und Aramäische Inschriften*, I-III. 1962-1964, 1966-1969. Bd. I. 5., erweiterte und überarbeitete Auflage,

古代地中海世界におけるフェニキアの宗教の発展と変容（佐藤）

2002, Wiesbaden, Harrassowitz.

*TSSI III: Gibson, J.C.L. (1982), *Textbook of Syrian
Semitic Inscriptions III. Phoenician Inscriptions.*
Oxford, Oxford univ. press.*

(註)

- (1) 佐藤育子「他者が語るフェニキア人とその記憶」周藤芳幸編『古代地中海世界と文化的記憶』（山川出版社、二〇二二年）、三二―三頁。
- (2) 課題番号 20251007「フェニキア・カルタゴ考古学から見た古代の東地中海」（研究代表者：京都大学大学院教授・泉拓良）：課題番号 25370875「西方地中海におけるフェニキアとカルタゴ―宗教的側面からの分析を中心に」：課題番号 16K03131「地中海におけるフェニキア・カルタゴ文化の発展と変容」。
- (3) 佐藤育子「フェニキア人の海外ネットワーク―前一千年紀前半の地中海世界」神崎忠昭・長谷部史彦編『地中海圏都市の活力と変貌』（慶應義塾大学文学部、二〇二一年）、四頁。
- (4) H. Sader, *The History and Archaeology of Phoenicia*, Atlanta, SBL Press, 2019, p.184.
- (5) H. Niehr & P. Xella, *Encyclopaedic Dictionary of Phoenician Culture II.1: Religion-Deities and Mythical Characters*, Leuven-Paris-Bristol, Peeters, 2021, p.151. 以下、*EDPC* II.1と略す。
- (6) 訳文はフラウウィウス・ヨセフス著（秦剛平訳）『ユダヤ古代史3旧約時代編「Ⅷ」巻』ちくま学芸文庫、一九九七年を使用した。
- (7) G. E. Markoe, *Phoenicians, Berkeley/Los Angeles, University of California Press, 2000, p.117*. 邦訳はグレン・E・マコーウ「片山陽子訳」『フェニキア人』（創元社、二〇〇七年）、一五五頁。
- (8) P. Xella, "Religion", in C. López-Ruiz & B. R. Doak (ed.) *The Oxford Handbook of the Phoenician and Punic Mediterranean*, Oxford, Oxford univ. press, 2019, p.278. 以下、Xella, Religionと略す。
- (9) テュロス同様、考古学的に神殿の存在は証明されていないが、カルタゴ出土の碑文史料からメルカルト神殿の存在を読み取ることが可能である（*CIS* I, 4894, 5575）。またメルカルトの名前を含む多くの人名が碑文史料に見いだされることから、確実なように、カルタゴでもメルカルト崇拜は行われていた。だが、母市テュロスのような世襲の王政の存在を明らかに示唆する碑文は出土していない。
- (10) スマイティング・ゴッド（Smeiting God）という呼称は、一九六二年のスマイス論文（E. H. Smith, "Near Eastern Forerunners of the Striding Zeus", *Archaeology* V, 1962, pp.176-183.）に初めて見られる造語であるが、その後一九七二年のロランの論文のタイトル（D. Collon, "The Smiting God", *Levant* 4, 1972, pp.111-134）より用いられ、その概念が広く定着した。日本ではその定訳がいまだ確立されていないため、あえてゴッドはそのままスマイティング・ゴッドと音訳する。なお、スマイティング・ゴッドの研究史についての概要は、E. Lipinski, *Reshet (Studia Phoenicia* 19), Leuven, 2009, pp.139-149を参照のこと。
- (11) 岡村美幸「西地中海におけるメルカルトⅡヘラクレス信仰の広がり」とハンニバル期カルタゴ」『西洋史学論集』五八号、二〇二一年、一三頁。
- (12) メルカルトとヘラクレスの習合については、I. Malkin, *A Small Greek World*, Oxford / New York, Oxford univ.

古代地中海世界におけるフェニキアの宗教の発展と変容 (佐藤)

- press, 2011, pp.119-141 参照(シム)°
- (13) J. Quinn, *In Search of the Phoenicians*, Princeton / Oxford, Princeton univ. press, p.52.
- (14) *EDPC* II.1, p.21.
- (15) *75 Selected Works from the Permanent Collection National Archaeological Museum*, Madrid, Ministry of Education, Culture and Sport, 2016, p.42.
- (16) *ibid.*, C. López-Ruiz, *Phoenicians and the Making of the Mediterranean*, Cambridge, MA / London, Harvard univ. press, 2021, p.220.
- (17) *EDPC* II.1 p.24.
- (18) C. López-Ruiz, *op.cit.* (note 16), pp.218-222.
- (19) *EDPC* II.1 p.23.
- (20) S. Celestino & C. López-Ruiz, *Tartessos and the Phoenicians in Iberia*, Oxford, Oxford univ. press, 2016, pp.238-253.
- (21) D. H. Trump, *Malta: Prehistory and Temples* (2nd ed.), Valletta, Heritage Malta, 2004, pp.238-241.
- (22) A. Bonanno, *Malta: Phoenician, Punic and Roman*, Valletta, Heritage Malta, 2005, p.84-85. なお碑文の読みについては色々な解釈があるが、シムは Bonanno の見解に従った。
- (23) 聖域(神殿)の時代(シム)の変化・転用について Bonanno, *op.cit.* (note 22), pp.284-289 がある(シム)°。
- (24) G. E. Markoe, *op.cit.* (note 7), p.117; シム・イ・イ・ロー・コウ「片山陽子訳」前掲書(註へ)「一五五頁」。
- (25) C. López-Ruiz, *op.cit.* (note 16), p.166.
- (26) *EDPC* II.1, p.37.
- (27) J. B. Pritchard, *Recovering Sarepta, A Phoenician City*, Princeton, Princeton univ. press, 1978, pp.104-108; id., "The Tanit Inscription from Sareptā", in H. G. Niemeyer(ed.), *Phönizien im Westen*, Mainz am Rhein, Philipp von Zabern, 1982, pp.83-92.
- (28) E. Lipiński, *Dieux et déesses de l'univers phénicienne et punique*, Leuven, Peeters, 1995, pp.203-204.
- (29) Xella, *Religion*, pp.282-283.
- (30) 前三世紀から前一世紀のエル・ホフラ出土の碑文では、カルタゴの場合とは逆にバル・ハモン(シム)の名前がタニトに先立ち、地域差や時代差を考慮する必要がある。なお、同地出土のギリシヤ語碑文中に見られる Θυνίθ(シム)という名称から、タニトは本来はティニトと呼ばれた可能性が高い。F. Bertrand, "Les représentations du <Signe de Tanit> sur les stèles votives de Constantine – III^e-I^{er} siècles avant J.-C.", *Rivista di Studi Fenici* 21-1, 1993, p.7; E. Lipiński, *Dieux et déesses de l'univers phénicienne et punique*, Leuven, Peeters, 1995, p.199, esp. note, no.48.
- (31) B. Costa, "Tbiza", in C. López-Ruiz & B. R. Doak(eds.), *The Oxford Handbook of the Phoenician and Punic Mediterranean*, Oxford, Oxford univ. press, 2019, p.571; P. van Dommelen & M. López-Bertran, "Hellenism as subaltern practice: rural cults in the Punic world", in J. R. W. Prag & J. C. Quinn(eds.), *The Hellenistic West*, Cambridge, Cambridge univ. press, 2013, p.282.
- (32) B. Costa, *op.cit.* (note 31), p.577; P. van Dommelen & M.

López-Bertran, op.cit. (note 31), p.282.

- (33) イビサの土壌は、ブドウ栽培より野生オリーブの生育に適していること (Diod. 5. 16. 2)、『また良質ですばらしいイチジクが実ること』 (Plin. 15. 82) 古典史料は伝えている。
- (34) P.van Dommelen & M. López-Bertran, op.cit. (note 31), p.283.
- (35) P.van Dommelen & M. López-Bertran, op.cit. (note 31), p.284.
- (36) この青銅製のプレートは現在アリカンテ考古学博物館で見ることができ、タニトの名前が刻字されている片面だけの展示になっているが、三行目にははっきりと「我らが女主人へ 偉大なるタニトへ」という銘を読むことができる。
- (37) この仮説の根拠については、本稿執筆中にイビサ島、プッチ・デス・モリンス博物館の館長でもあるB・コスタ氏にメールで問い合わせ、聖域内には前四世紀のアッティカ産のレキトスを除いて前三世紀以前の物的証拠がなく、祭儀の存在を証明するには不十分であることに拠っているという、有益な回答をいただいた。記して感謝の意を表したい。
- (38) P. van Dommelen & M. López-Bertran, op.cit. (note 31), p.294-295.
- (39) P. van Dommelen & M. López-Bertran, op.cit. (note 31), p.295.
- (40) P.van Dommelen & M. López-Bertran, op.cit. (note 31), p.286.
- (41) 本展覧会は、チュニジア共和国の国立博物館に所蔵されている作品群から出品され、作品の選定およびその解説は、
- チュニジア国立遺跡研究所 (INP) が全面的にその責任を負っている。この展覧会の概要と意義に關しては、佐藤育子「古代カルタゴとローマ展に学ぶ」『史艸』五〇号、二〇〇九年、一五六―一六八頁を参照のこと。
- (42) 『古代カルタゴ・ローマ展―きらめく地中海文明の至宝』(東映株式会社、二〇〇九年)、七七―七八頁。
- (43) 同上、六三頁。
- (44) P. ter Keurs, "Carthage: Fact and Myth", in R. Docter et al.(eds.), *Carthage: fact and myth*, Leiden, 2015, p.11. こちらは、オランダのライデンで二〇一四年一月から二〇一五年五月にかけて開催された「カルタゴ展」に関する書籍でのコメントである。
- (45) トフェトの現状を包括的にまとめたものとして以下の研究が参考になる。A. Orsingher, "Understanding Tophets: A Short Introduction", *The Ancient Near East Today* 6 (2), 2018, February.
- (46) 佐藤育子「他者が語るフェニキア人とその記憶」三三―三三五頁。
- (47) M. E. Aubet (tr. M. Turton), *The Phoenicians and the West. Politics, Colonies and Trade* (2nd ed.), Cambridge, Cambridge univ. press, 2001, p.255.
- (48) J. Quinn, op.cit. (note 13), pp.91-112.
- (49) 彼女の論調はほかにも以下の論文等が参考になる。J. C. Quinn, "The Cultures of the Tophet : Identification and Identity in the Phoenician Diaspora", in E. S. Gruen (ed.), *Cultural Identity in the Ancient Mediterranean*, Los Angeles, Getty Research Institute, 2011, pp.388-

古代地中海世界におけるフェニキアの宗教の発展と変容（佐藤）

413; id, "Tophets in the 'Punic World'", in P. Xella (ed.), *The Tophet in the Phoenician Mediterranean*(= *Studi Epigrafici e Linguistici sul Vicino Oriente Antico* 29-30), Verona, 2013, pp.23-48.

(50) Xella, Religion, p.288.

(51) 佐藤育子「紀元前一千年紀におけるフェニキアの海外発展—宗教的側面を中心に—」『古代オリエント博物館研究紀要』二九／三〇号、二〇〇九—二〇一〇、七八頁。

（日本女子大学学術研究員）

※本稿は註2に記したように、これまでの科学研究費助成事業による研究成果の一部である。